



りっしゅう

立秋（7日）… セミが鳴き、暑さはまだまだ続きます …

暦の上では秋となり、暑中見舞いから残暑見舞いに切り替わる日です。とは言え、実際的には東京では真夏日や猛暑日が続出し、蝉の鳴き声が暑さを増幅させるような季節です。こまめな水分補給と「早寝早起き朝ごはん」を心掛け、暑さに負けない体づくりをお願いします。

<寒蝉鳴 ひぐらしなく 8月12日～16日>

立秋の次候は「寒蝉鳴」です。例年、田舎に帰って近くの高原に出掛けると「カナカナカナ」という「ヒグラシ」の声を聞いたように思います。暑さはまだ収まらないものの、日が暮れるのが早くなり、季節が徐々に移り変わっていることを感じる頃でもあります。

<現実に立ち向かう力の根っこを育てる>

今年は、帰省や旅行もままならず、特別な夏休みを過ごしていることでしょうか。国や都、各自治体からの発信も様々ですから、判断に迷いますね。しかし、この状況は、私たちがどんな子どもを育てようとしているのか、という基本を再確認させてくれているとも言えます。現在、進められている教育改革は、予測が難しい状況に対しても、前向きにいろいろな人と協力して立ち向かうことができる人材を育てることを大事にしています。青南幼稚園の目指すところも、まさにそこです。今こそ、正しい情報をしっかりと集め、いろいろな人と意見を交換し、最終的には自分で判断する力をもつことが大事です。「誰かが言っているからそうしました」では、これからの世の中を生き抜いていくことは難しいということを、今私たちは切実に体験しているはずですよ。

<自然との関わりを通して育てたいこと>

この夏休みは、子どもたちの体験不足を心配している方も多いかもしれません。それを補うものとして、習い事や絵本、知育玩具などで、字が読めるようになったり名前を覚えたりすることは、目に見えやすく、親としては安心できることかもしれません。しかし、幼児期に大切なのは知識ではありません。「それ図鑑で見たから知っているよ」と言う子を育てたいのではありません。私が蝉の羽化の様子などをお伝えしているのは、命の不思議や厳しき、人の思うようにはいかないことを、実体験を通して感じてほしいからであり、そのきっかけになればと思うからなのです。

鳴く蝉を捕まえたいと思うのは、子どもの本能です。鳴き声はするのにも、どこにいるのかも分からず、なかなか捕まえられないと、気持ちが萎えるものです。しかし、そのうちに、抜け殻ならば自分でも取れることに気付いて、探し始める子が出てくるのも幼児らしい姿です。とにかく自分で捕まえたいという思いが行動の原動力です。7月には抜け殻をようやく見付けて飛び上がって喜ぶ子がいて、そばで見ていた私は、そのことに驚いたほどです。自分の意思で目の前の状況に対峙し、いろいろなことを乗り越えて見つけたからこそ喜びが大きいことを改めて痛感しました。休み明け、抜け殻をたくさん持ってくる子がいるでしょうが、それは、自らの努力の確かな手応えであり証です。

苦勞して捕まえた蝉を手で持ったときに、ジッ…と体が震えてびっくりする経験をするでしょう。何回か繰り返すうちに、腹の様子に違いがあることに気付くかもしれません。鳴く蝉はオスで、鳴き声でメスを誘っていると図鑑には書いてありますが、実体験を通してそのことを知ることに大きな意味があるのです。



このように羽化の途中で命が尽きてしまうこともあります。命の誕生は当たり前ではなく、奇跡なのです。



アブラゼミの腹を見ると、オスには矢印のところに、腹弁という鳴き声を出すための器官があることが分かります。メスにはありません。

